

## ももたろう基金【第8次助成】 事業実施報告書

実施事業	西日本豪雨災害復興支援 被災地の障がい児の保護者支援プロジェクト		
実施者名	NPO法人 ペアレント・サポート すてっぷ		
助成金額	500,000 円		
受益者数	直接受益者	160 (間接受益者	500 名)

※イベント実施や複数回実施事業は別紙で各回の人数等、対象者数のわかる資料を添付ください。

### 実施した事業の内容・成果

#### <実施内容>

・西日本豪雨災害の被災地・真備町にて、主に障がい児の保護者を対象とした集まりの場「真備カフェ」を実施。保護者を支えるための様々なイベントを年間を通じ、月2回ペースで開催しました。「真備カフェ」の年間参加者数は160名でした。

・被災地を支援するためのクリスマスチャリティイベントを実施。現在の被災地の状況を知ってもらうために真備、長野、福島の3カ所の被災地支援を行った支援者3名からの報告、チャリティの人集めと被災地関係者を慰労する目的でのプロミュージシャンによる音楽Live、そして寄付金の足しにするための物販を実施しました。イベント参加者数は30名でした。集まった7万強の寄付金は各被災地へお届けしました。

#### <成果>

・「真備カフェ」は、様々なプログラムを「真備で」実施したことに大いに意味がありました。同じ倉敷市民でも真備に縁がない人が多く、被災地の現状をいまだにまったく知らない人も多いのですが、弊法人のイベントに参加する目的で、被災地以外の人々が真備に足を運ぶ理由になり、真備在住者との交流の機会を得ることで、関心を寄せる機会となりました。また、被災した保護者には、イベント参加の楽しみもありましたが、それ以上に、真備でカフェを実施することが、「あなたたちのことを忘れていません、大事に思っています」というメッセージとなって伝わったようです。チャリティイベントに関しても、被災地の人たちを慰労する意味と地域社会の関心を被災地へ向ける意味で行いましたが、会場が真備の中で設定できなかった（場所がない）ことも災いして、下準備や広報活動に相当努力したにもかかわらず、参加者数は思っていたよりもかなり少なく、被災地に対する関心が急速に薄れて行っていることを強く感じる結果となりました。

### 活動の様子（写真などを添付してください）



バターもちづくりワークショップの様子



「おはぎと抹茶を楽しむ会」の様子



クリスマスチャリティイベントの様子



クリスマスチャリティイベントの様子

**決算報告** (※原則として領収書の写しを添付いただきます。)

今回実施した事業の決算内容は下記の通りです。

費目		金額(円)
収入の部	ももたろう基金助成金	500,000
	寄付金	32,094
収入合計		532,094

費目		算出根拠	金額(円)
①当プログラム助成金 対象費目 当プログラム助成金(このプログラムで集めた寄付金)を充てる費目	旅費交通費	真備カフェ講師交通費¥960 チャリティイベント被災地報告者交通費¥1,200 チャリティイベント駐車代¥4,200	6,360
	消耗品費	真備カフェ消耗品費¥16,586 真備カフェ材料費¥28,426 チャリティイベント消耗品費¥54,145	99,157
	印刷製本費	インクカートリッジ¥12,160 コピー用紙・ファイル¥2,516	14,676
	報償費	真備カフェ講師謝金3名×@8,817	38,901
	委託費	チャリティイベントPA照明¥302,500 チャリティイベント記録撮影¥30,000	332,500
	人件費	チャリティイベント5名×9h×@900	40,500
	小計		532,094
②その他費目 当プログラム助成金(このプログラムで集めた寄付金)を充てない費目			
	小計		0
支出合計			532,094

**寄付者へのメッセージ**

みなさまからご支援をいただいたおかげで、1年間、真備に通い、真備のためのイベントを様々に実施することができました。災害のことは、急速に社会から忘れられて行っていると感じます。「忘れられてしまう」「置き去りにされる」ことで、被災地の人たちは傷つき、力を失ってしまいます。しかし、私たちが1年間真備に通い続けたことが、私たちが考えていた以上に、被災地の人たちを励ますことができたようでした。「どうして真備に来てくれるの」「お祭りにわざわざ来てくれたよね」「あなたたちに会えるのが嬉しいの」…言葉の端々に、喜びが感じられました。真備に通って本当に良かったと、そのたびに強く思いました。この活動を続けさせてくださり、本当にありがとうございます。

## 今後の活動

私たちは、2020年度も、真備に通いたいと思っていました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大局面で、高齢者の多い真備町に、うっかり行くことができなくなってしまいました。それでも、「忘れていません、心を寄せています」ということを、なんとかして伝えていきたいと思っています。オンラインに対応できない方にも、肉筆のお手紙を折々に差し上げる、時にはこちらから電話してみるなどして、心を繋いでいこうと思います。全国的に皆が危機的な状況に置かれている今だからこそ、ウイルスのことだけでなく被災した傷を抱えている真備町の保護者の皆さんに対して、今まで以上に丁寧な関わりを保つ努力が欠かせません。